

2022年8月28日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「善をもって悪に勝ちなさい」

聖書:ローマの信徒への手紙13:1～7

ロマ書 13 章の「人は皆、上に立つ権威に従うべきです」との箇所は、キリスト教会において物議を醸す内容かと思う。私たちの社会の良し悪しは、政治の在り方に大きく左右され、為政者の思惑により、再び戦争へと向かうこともある。ゆえに「上に立つ権威に従うべき」かどうかは、当然ながら吟味されるべきである。

出エジプト記の箇所を見たい。かつてエジプトで過酷な労働を強いられ、虐待されていたイスラエルの民は、厳しい政治権力に苦しめられた。民がこれ以上繁栄しないようにエジプト王からの勅令で、「男の子が生まれたら殺せ」というものがあつた。しかし、命令を受けた二人の助産婦シフラとプアは「神を畏れていたので、エジプト王が命じたとおりにせず、男の子も生かしておいた」(出 1:17)。ここでは「上に立つ権威」に従わない女性がいて、その行為に神の祝福が記されている。

福音書の中で上の権威に対する場面がある。イエスを試みようとする税金の問題を投げかけられるのだが(マルコ 12:13-17)、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」(マルコ 12:17)と答えている。イエスは「上に立つ権威に従う」意味で、国家が定めた税金は納めるべきだと「皇帝のものは皇帝に」と言っているのか？ この時代もそうだが、上に立つ傲慢な権威者が、その民に対して貧しくあろうが、病人、障害者であろうが、容赦なく、住民を数え上げ、税金を巻き上げていた。イエスが、そういう意味において税金は納めるべきだと言うはずはない。

イエスは、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言うが、「神のものは神に」という時、神のものでないものがあるだろうか？「皇帝のもの」も全ては神のものである。つまり、ローマ皇帝の命令は、神の御心に照らして批判的に、吟味されなければならないということであり、全てのものは神に属するゆえに皇帝の命令は、神の正義と矛盾しない限りにおいて、正統性をもつということになる。

ロマ書 13 章には、「権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです」(4、6 節)とあり、「権威者は」、「神に仕える者」という事が前提にある。しかし、人の上に立つ権威者は、時に悪魔化し、暴徒化することはいつの時代においても出現する。その事を踏まえてか、この 13 章 1 節の前の節、12 章 21 節に事前にこう記す。「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(12:21)。先ほどの出エジプト記に出てきた二人の助産婦シフラとプアの行為は、このところに繋がる。

最後に、人の上に立つ権威者とは、イエス・キリストの他はいない。全てのものの上に立つお方は、イエス・キリストである。(神谷)